

文学を通して垣間見る日本の近代化

— 擬西洋化の世界 —

尹 秀鎮 (学籍番号 11990908)

はじめに

明治維新以来、日本がめざましい近代化に成功して現在のような経済大国に発展してきた原動力が、日本人の新しいもの、外のものに対する旺盛な好奇心、吸取消化能力にあることはよく論じられてきた。

これは、明治維新以降のことだけにかぎられてはいない。現在まで続いている特徴でもあると言える。手近なところでは、デパート、とりわけ食品売場に出かけると、百貨店という以上、何でもとり揃えている事がデパートの身上とはいえ、日本のデパートの食品売場は、ありとあらゆる世界の食品が集められ、お客をひきつけて活気に満ちていることに驚く。和・洋・中の三本柱を軸に、イタリアのパスタやフランス素材の缶詰めはもちろん、韓国の焼肉やキムチ、インドのカレー、タイ料理やベトナムの生春巻、北京ダック、さらに、東南アジアの香辛料が入っているエスニック食品 (Ethnic cuisine) まで、まるで食品の博物館のような光景に目を奪われる。

その物の豊富さは食通国として知られているフランスに負けないのであろう。しかし、パリの食品店は、さすがに豊かな深い食文化を感じさせる品ぞろえをしているが、そこに並べているのはもっぱらフランスの伝統的な食品に限られている。チーズ一つを例にしても、百種類近い数をおいて、店側とお客の側で吟味するということにフランス食文化の質の高さがあるのであろう。それに対して、日本はごく気軽に外国のものを取り入れるが、その内容が浅い事が少なくない。

最近韓国と日本の共通開催で行なわれた、2002年ワールドカップを切っ掛けに韓国の文化、とりわけ「食文化」が日本に取り入れられブームになっている。わずか4、5年前まではキムチを食べるのはごく一部の人だけで、キムチが好きと公に言う人は物好きだと珍しがられた。

だが、最近、若者を中心に「韓国ブーム」で、韓国人である私より辛いキムチが好きだと言う人が多いのは勿論、私さえ知らない韓国の田舎の料理が好きだという人まで現われているから、その事実を受け止めることにしばしば困惑するし、違和感がある。

何でもどんどん日本の口にあう物を作り出して「和風化」する。その特殊性をよく表している例として、「キムチ鍋」や「デンジャンチゲ鍋 (韓国の味噌チゲ)」のような韓国の家庭料理がテレビCMで宣伝されている。キムチが普通の家庭の食卓で食べられるようになってきているが、味は本場のものとは掛け離れているので本当のキムチの味だとはいえない。

上記の事実は日本人の、他文化を拒まず吸収し日本化（和風化）する能力の高さを裏づけている。

今や韓国でも、より積極的に日本の文化を取り入れようとしているが、たとえどれほど日本食がブームになったとはいえ、すしやすき焼き鍋を家の中で夕飯に出す事はまずないだろう。

こういう和風化した日本文化の特異性はその国の顔ともいえる都市作りにも関わりをもっている。東京にきた外国人が、最初は「何と雑然とした調和のない醜い都市だ」という印象を受けても、少し東京の生活に慣れ、表通りの奥に広がる人々の本当の生活空間を垣間見ると、逆にそれらがこまやかにしっかりと組み立てられているのに驚く。

こうして西洋的＝近代的な要素と日本在来の要素が組み合わせられながら、ある種の環境の安定状態と生活空間の文脈を保ちつつ、変化に富んだ近代の日本が形成されてきたとも言えよう。

しかし、このような独特の日本の都市の生成の背景には、盲目的に西洋文化を追求せざるを得ない日本文化を「模倣文化」と卑下する傾向が日本人にある。

盲目的な西洋心酔に陥っていて、自国の国粹の美しいものや貴いものを総て犠牲にしてまで、西洋を受け入れようとするだけであれば、外国人の眼から見ると洵に愚かな事であると思われる。

けれども、よく観察すると、日本人は決して心の中から真に西洋を崇拝しているのではない。元来日本の開国は、日本が自然的に求めて西洋と交通したのではなく、西洋のほうから黒船を率いて、大砲や軍艦をもって来て、日本を脅かすために、止むを得ず開港したのである。しかし、日本が自発的に求めた開国ではない西洋諸国との国交もまたこちらから望んでものではなかったという歴史的事実を踏まえても、日本人の盲目的な西洋心酔が根深く残っており、それが、「愚かな事」に思われたのであろう。

表向きの外観だけの文明の成長と外形のみの西洋化すなわち「擬西洋化」は日本の近代化の特質であろう。明治時代来航した、ジョルジュ・ビゴーが「猿真似」と諷刺し、ピエール・ロティが“公のどえらい笑劇”と諷刺したそれである。

近代日本人が盲目的な「猿真似」をしながら疾走してきた、その理由はどこにあるのだろうか、またその努力があったからこそ日本近代化の大きな側面を形成していたことは間違いないのであろう。その半面、盲目的な“猿真似”は過渡期の日本近代、開国と共に目まぐるしく押し寄せる西洋の文明、文化を濾過する暇さえ持たず受け入れなければならなかったからであり、その後遺症として日本文化が「擬西洋化文化」「模倣の文化」だという汚名を着せる結果となってしまった。

しかし、日本近代化の進歩は「擬西洋化」や「模倣文化」の背景があつて、その試行錯誤が重なり、現在の新しく独創的なものがつくられてきたのだと思う。それこそ、「第二の創造＝混合文化」ではなかろうか。

「第二の創造＝混合文化」の特性をもつ日本近代文化は、欧米の西洋文化と日本伝統文化を折衷し日本化した「混合文化」を創造したのであろうと思う。

「擬西洋化文化」や「模倣の文化」だと批難される日本近代文化であるが、日本人の姿を滑稽で愚かだと言で評価することは難しい。それは、日本は「擬西洋化文化」を乗り越え「第二の創造＝混合文化」を産み、今に至る確固とした「日本文化」を持っているからであると思う。

こういう日本文化の特異性、多様性の「日本文化の辿り道、いわば背景」や「文化の変化や経緯そ

して定着」について調べたい。そのために文化の伝統的な流れから切り離れさせて考えられる事が多かった「文学」を文化と社会表現として解釈してみようと思う。

明治以降の日本、開国、日清戦争前後の都市の変貌、日本人の思想の変貌、外国文化への旺盛な好奇心と吸収消化能力による擬西洋化、「滑稽で愚かな」日本人を小説の作品を通して啓蒙させようと努力した知識層の苦闘。それらを「文学を通して垣間見る日本の近代化—擬西洋化の世界」というテーマに沿って、近代小説を題材に論じてみたい。

「擬西洋文化」のスタート

—開国の日—

一八五三（嘉永六）年、浦賀の沖に黒々とした艦隊の姿が現われた。蒸気船二隻、帆船二隻からなるその船団は、今から思えばいささか不思議な姿に思われるかもしれない。二隻の蒸気船がそれぞれ砲艦（ガンボード）を曳航していたのである。こうした船団の組み方は当時としてはよくあるものだったが、今日ではみられない艦隊編成である。

当初この日本遠征が企てられたとき、ペリーの艦隊は蒸気船ミシシッピ号、プリンストン号、アレガニー号、ヴァーモント号に砲艦のヴァンダリア号とマセドニアン号を従えることになっており、さらに東インドから蒸気船サスゲハナ号と砲艦サラとガ号とプリマス号が交流し、武装輸送船サブライ号、レキシントン号、サザンプトン号も同行するという豪華版であった。

日本人はこの「黒船」の出現に肝を潰したけれど、やってきたペリーたちのほうも、結構な大冒険だったのであろう。

ペリーらは驚愕する幕府を相手に、国を開き、外交関係を結ぶことを要求する。このときは大統領フィルモアからの国書を渡しただけで帰還したペリーは、翌年また来航して幕府とのあいだに日米和親条約を締結する。「一八五四年三月三十一日および嘉永七年三月三日」と、それぞれの国の日付が示されたその条約には、アメリカと日本が和親する事が取り決められ、下田と箱館（函館）の二つの港にアメリカの船舶が寄港することが認められていた。ここに日本は長い鎖国を破って、国を開いたのである。

こうして一八五四年は欧米諸国にとって、日本が門戸を開放した記念すべき年となった。日本の近代化の出発点を一八六八年の明治維新に置いているが、外国の教科書を見れば、それは日本語国内での政変にすぎず、あくまでも開国が彼らにとっての起点となっていることを知らされる。

こういう経緯で内部からの開国ではなく、外部（欧米）の圧力による開国によって、海外の新しい文明を日本国民は滲す暇もなく受け入れることになった。その結果、明治前半までの生産的で真面目な日本人から生産より消費に、文明より文化に目が行くようになった。

第一の真面目で生産型の昔からの日本人、第二の実学を通して勉強する知識層、第三の消費型の新しい日本人への掛け橋となるのが、市電の出現である。市電の出現により東京はモダン（Modern）都市へと変貌するのである。

東京のモダン（Modern）都市への変貌による意識の変貌

—真面目な生産型人間から消費型人間への変化—

夏目漱石（一八六七～一九一六）の『三四郎』が『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載されたのは明治四一（一九〇八）年のことであった。日本がロシアとの戦争に勝利して三年後である。

日露戦争が勝利に終わったことは、日本の近代そのものの勝利であった。西洋列強に遅れて近代化をはじめた東洋の小さな島国が大国のロシアを破った。明治維新以来の富国強兵、殖産興業の文明化政策が結実した。日露戦争を契機にして日本は新しい時代に入った。

『三四郎』はその二十世紀はじめの新しい時代の気分の中で書かれている。そこには近代化の次の段階に入った日本の社会の姿が随所に映し出されている。

主人公の小川三四郎は、東京帝国大学の文学部に入学し、福岡県から汽車に乗って、上京してくる。山陽鉄道（下関－神戸）、東海道本線（神戸－新橋）を利用するのだが、山陽鉄道が開通し、東京と九州が鉄道によって結ばれたのは明治三四（一九〇一）年、日露戦争の前夜のことだった。

武田清明『三四郎の乗った汽車』（教育出版、一九九九年）が指摘するように、「九州ですら明治三〇年代に至るまで鉄道は縦貫していなかったのである。」「鉄道状況が一挙に変わるの、日露戦争を契機とする」。

それが、戦争前夜に変わった。国内の鉄道網が整備されていった。それによる兵力物資の輸送増強が日露戦争を勝利に導いた要因の一つになった。

日露戦争後、明治三九（一九〇六）年には、鉄道国有法が採択され、それまでは東海道本線を除けば他は私設鉄道だったところ、国内鉄道の九割が国有化され、全国ネットワーク化されていくのである。

三四郎はこの新しく整備された国有鉄道を利用して東京にやってくる。日露戦争後の新しい世代であることがわかる。この主人公はこれから日本はさらに発展するだろうと明るく信じている。夏目漱石というと明治の文豪という印象が強いが、『三四郎』は明らかに二十世紀の新しい時代の思考を持つ作品となっている。

明治四一年（一九〇八）年、三四郎が上京してきた東京は、日露戦争のあと、モダン都市へと変貌しつつある。

何より馬車が変わって電車が登場したことが大きい。東京では、明治三六年（一九〇三）年に品川－新橋間に東京電車鉄道の路面電車（市電またのちに都電）が開通して以来、わずか数年のあいだに、電車のネットワークが整備されていった。当時、東京にはこの東京電車鉄道はじめ、東京市街鉄道（街鉄）、東京電気鉄道（外濠線）の三つの民間会社があったが、明治三九（一九〇六）年には合併、さらに明治四四年（一九一一）年には東京市に買収され、すべて「市電」になった。

電車は東京の生活、風景を大きく変えた。市電が開通していくことでそれまでは郊外地だった新宿や渋谷が開け、日露戦争後の重工業の発展に伴い増大していく人口を吸収していく。市電を利用する事で都市住民の行動半径が大きくなり、新しい繁華街が形成されていく。

三四郎はこの新しい電車の時代に東京にやってきた。そして電車と、それが作り出す都市の活力に

カルチャーショックを受ける。

三四郎が東京で驚いたのは沢山ある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴る間に、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。次に丸の内では驚いた。尤も驚いたのは、どこまで行っても東京がなくなると言う事であった。

(『三四郎』)

三四郎は電車によって拡大し、変貌する都市風景に驚いている。明らかに明治の文明開化とは違う時代が始まっている。三四郎は、先輩に東京の町に早く慣れるにはどうしたらいいだろうと相談する。先輩は電車に乗るがいいという。「電車に乗って、東京を十五、六返乗回しているうちには自ら物足りるようになるさ。」そこで三四郎は、本郷から市電に乗り、新橋、日本橋方面に出かけていく。電車に乗る事で東京の地理を確認するだけではなく、都市風景の中に溶け込んでいく。慣れてくると、田端、染井墓地、護国寺、新井薬師へと足を伸ばしていく。「ふわふわして諸方歩いている」、三四郎は都市の遊歩者となって、変革期の空気を十分に味わっている。大久保に野々宮兄妹を訪ねてもいるが、かつては田舎だった大久保村が郊外として開けてきたのも市電の開通によってである。「野々宮の家は頗る遠い。四、五日前大久保へ越した。しかし電車を利用すれば、すぐに行かれる」。市電にのればわずか半日のあいだに、四谷の山の手から、日比谷、銀座の繁華街、さらに下町の深川と東京の諸相を目の当たりにする事ができる。

三四郎は先輩たちに連れられて本郷や上野界隈の西洋料理屋や洋食屋に入る。ナイフとフォークを使って食事をする。シャンパンを飲む。本郷の洋食屋ではライスカレーを食べる。三四郎は、町歩きをしたり外食をしたりすることで徐々に東京に馴染んでいく。こういう近代化されつつある三四郎には三つの世界が出来た。

一つは遠くにある。与次郎の所謂明治十五年以前の香がする。凡てが平穩である代りに凡てが疎坊気ている。尤も帰るに世話はいらぬ。戻ろうとすれば、すぐに戻れる。ただいざとならない以上は戻る気がしない。云わば立退場の様なものである。三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場の中へ封じ込めた。なつかしい母さえ此処に葬つたかと思うと、急に勿体なくなる。そこで手紙が来た時だけは、暫くこの世界に低徊して旧歡を温める。

(途中略)

第二の世界に動く人の影を見ると、大抵不精な髭を生やしている。あるものは空を見て歩いている。あるものは俯向いて歩いている。服装は必ず穢ない。生計はきつと貧乏である。そうして晏如としている。電車に取り巻かれながら、太平の空気を、通天に呼吸して憚らない。このなかに入るものは、現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸である。広田先生はこの内にいる。野々宮君もこの内にいる。三四郎はこの内の空気を略解し得た所にいる。出れば出られる。然し折角解し掛けた趣味を思い切つて捨てるのも残念だ。

第三の世界は燦として春の如く盪いている。電燈がある。銀匙がある。歓声がある。笑語がある。泡立つ三鞭の盃がある。そうして凡ての上の冠として美しい女性がある。三四郎は

その女性の一人に口を利いた。一人を二遍見た。この世界は三四郎にとって最も深厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づき難い。近づき難い点に於て、天外の稲妻と一般である。三四郎は遠くからこの世界を眺めて、不思議に思う。自分がこの世界のどこかへ這入らなければ、その世界のどこかに欠陥が出来る様な気がする。自分はこの世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい。それにも拘わらず、円満の發達を冀うべき筈のこの世界が却つて自らを束縛して、自分が自由に出入すべき通路を塞いでいる。三四郎にはこれが不思議であつた。（『三四郎』）

都市の消費者となつた三四郎は、自分はいま三つの違つた世界に生きてると感慨にふける。一つは遠い故郷。そこでは未だに昔からの生活が続いている。もう一つは東京の勉学の世界。そこには流行にとらわれずに学問に向かう、落ち着いた生活がある。この二つだけなら前の世代とさしたる違いはない。しかし、三四郎は同時に第三の世界を知ってしまった。いわばそこは、華やかな都市という禁断の園である。

このモダン都市という第三の世界を知ってしまったことが三四郎の新しさである。日露戦争勝利後に登場した、生産より消費に、文明より文化に目が行くようになった世代といふことができるだろう。

三四郎が日露戦争の勝利のあとに東京に出て来て、第三の世界に目覚めた事を思うと、二〇世紀のはじめ、モダン都市が誕生すると共に新しい時代が到来した事が伺えよう。日露戦後の世代は華やかな都市の消費文化に左右されやすいという事である。三四郎が銭湯の三越の看板に描かれた美女を見て心動かされたように、新しい世代は消費文化に敏感であり、かつ、弱いのである。その軟弱さがつねに消費文化との関連で語られるようになり、それがつねに日本精神によって批難されるのが日本近代の特色である。

第三世界に生きる日本の象徴「ナオミ」

一谷崎潤一郎『痴人の愛』一

谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）が震災後の大正十三（一九二四）年から、その翌年の十四（一九二五）年にかけて発表した『痴人の愛』の主人公がナオミである。彼女は、三四郎のいう第三の世界、都市の消費文化の中を蝶のようにひらひらと生きる新しい女性である。明治の真面目な生産型人間に比して、大正の消費型人間といえる。

ナオミは、浅草の雷門の近くにあるカフェの女給をしていた。やっと数え年で十五歳の少女である。『痴人の愛』の語り手である「私」こと河合譲治は、栃木県宇都宮の出身で、東京の蔵前の高等工業（東京工業大学の前身）を出てから、大井町にある電気会社の技師になった。二十八歳になる。一人暮らしで月給は一五〇円というから、公務員の初任給が七〇円ほどの時代には中流の上と言っていい。生活に余裕がある「私」はナオミと知り合い、「とにかくこの児を引き取つて世話をしよう。そして望みがありそうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に買い受けても差し支えない」と考える。つまり、少女ナオミを自分の好む女に仕立て上げようとする。女性を人形のような愛玩物と見てい

る。消費物と見ている。「私」にとってナオミはデパートのショウウィンドウに展示されている人物と変わらない。こういう美的生活にしか関心のない人間という設定そのものが、消費文化が開花していく大正期ならではのものとと言える。

しかも、一緒に暮らすようになる二人の生活は、徹底的して消費的である。『痴人の愛』は、この点だけでも日本の近代文学のなかでは、きわめて新しい。

三四郎は、第三の世界のきらびやかさに惹かれはするもの、やはりどこかに明治の青年の真面目さを持っていて、いずれは、第二の世界に戻っていくのだが、『痴人の愛』の「私」とナオミは、消費生活のなかに惑溺していく。消費三昧の生活になんら負い目やうしろめたさを持たない。徹底した消費人間である。

「私」はたしかにナオミの浪費癖に眉をひそめるが、それは倫理的に批判したいからではなく、単に、経済的に厄介に感じられてきたからに過ぎない。もし、「私」にもっと収入があれば、いくらでもナオミに贅沢をさせることは可能である。

「私」とナオミの生活は、生産とはまったく無縁である。そもそも子供を作ろうとしない。家庭を作ろうとはしない。ただ快樂だけに走っている徹底した消費的人間であり、明治の真面目な生産的な人間の対極にいる。谷崎潤一郎がこういう消費的人間を創出したのは、震災後の社会にモダン都市特有の消費状況が作られてきたからこそだろう。

生産や節約、勤勉が重んじられた明治時代には『痴人の愛』は生まれようがない。

ナオミは、家事はほとんどやらない。暇があれば活動写真やダンスに行く。「私」に「あたし、英語が習いたいわ」「あたし、何処かへ、海水浴へ行きたいな」などとよく“おねだり”する。その結果、『痴人の愛』には消費文化があふれかえっていく。カフェ、デパート、ダンス、活動写真、海水浴、花。それはそのまま大正時代に開花していく都市の消費文化の反映である。

たとえば明治三十八（一九〇五）年にデパートメント・ストアたることを宣言した三越は、大正三（一九一四）年に地上六階のルネサンス様式の壮麗な建物を日本橋に建設した。当時有名な広告コピー“今日は帝劇、明日は三越”はこのときに作られた。三越のあとを追うように大正八（一九一九）年には、白木屋、松屋、高島屋が近代的なデパートの第一歩を踏み出した。

『痴人の愛』のナオミの消費生活の背後には、このようなデパートの誕生という時代の流れがある。活動写真やダンスに明け暮れているナオミは彼女なりの“今日は帝劇、明日は三越”を実践しているのである。

大正時代、とりわけ『痴人の愛』が書かれた震災後の一九二〇年には、モダンな都市文化が次々に開花していく。

『痴人の愛』の「私」は「ナオミちゃん、お前の笑顔はメリー・ピクフオードに似ているね」と映画の主人公に例える。内面的な美しさより、外面的な美しさを追求する。精神的な成長なしに、肉体だけが成長する、日本の姿を代表し、描かれているのであろう。

明治の真面目な生産型の日本人から消費型の日本人に変貌する第三の世界の近代化された都市、ここでは新しさに惹かれて外国の文明を濾過なしで盲目的に受け入れる。

その結果、精神的な成長のない肉体的快樂のみを追求する精神を病んでいる日本人の内部の変貌は

どういう経緯で生じたのであろうか。

その経緯を知るのには、時代を遡って検討してみるしかない。

その背景には、日本の急激な西洋化＝近代化がある。開国と同時に瀟々されることなしに入って来た西洋の文明。欧米に対して日本固有の文化を主張する余裕などはなかった。不平等条約を改正したいという必死の思いは、欧米人の生活水準に匹敵する生活することで、西洋と同等な立場を持つことができる考えた。その結果、西洋文明の「直輸入」こそ日本近代化の特効薬だと思われ、「鹿鳴館」が建てられた。「鹿鳴館」は外形だけの西洋化を図った日本の「擬西洋化」の象徴でもあるし、精神的な成長を伴わず盲目的に西洋文化に受け入れた後遺症でもあったのではばないだろうか。

そこで、「滑稽で愚かな」擬西洋文化を短時間に吸収しようとした、時代の背景や思考について考えたい。

滑稽で愚かな擬西洋化の極大化「鹿鳴館」

—ピエール・ロティ「江戸の舞踏会」—

明治十六年（一八八三）十一月二十八日、東京麹町山下町に、西洋社交クラブ、鹿鳴館が誕生した。鹿鳴館の誕生の背景には外務卿井上馨が強力な推進があった。井上馨は、関税や治外法権など種々の問題を抱えた不平等条約を改正すべく、その基層にある西洋の日本蔑視を改めさせるには、日本の文化が西洋並に高い事を示威する必要があると痛感して、西洋風の社交クラブを設立した。

この鹿鳴館を設計したのはイギリス人の若き建築家、ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 一八五二～一九二〇）である。明治十年に来日し、工部大学校造家学科（現東京大学工学部）の教師として多くの人材を育てた。彼が設計した建物は他に、帝国博物館（現東京国立博物館）、ニコライ堂、三菱の岩崎久彌邸などがある。

鹿鳴館の建築費は十八万円、当時の物価から考えると現在の四十億円くらいに相当するものと思われる。あちこちの部門からかなり無理して予算を拠出させ建てられた。建坪四四〇坪、レンガ作りの二階建てに、イタリアルネッサンス風にイギリス風を加味したデザインだった。

開館した当時は西洋風の衣装に見を包んだ六〇〇人の紳士淑女が集まった。一八八五年になるとルー率いる軍楽隊が吹奏楽を演奏。貴族たちはダンスに興じる。

鹿鳴館はいわば欧化主義のシンボルであり、日本の社交界のあけぼのでもあったが、同時にそこには日本の急速な近代化の営為とその歪みが集約されているようにも考えられる。

「鹿鳴館」という名称は井上馨夫人の武子の前夫で、風流官僚として知られた薩摩出身の桜州山人中井弘が命名した。『詩経』の「小雅鹿鳴の詩」に由来するが、「鹿鳴燕群臣嘉賓也」と説明されているように迎賓接待の意味を持つ。

芥川龍之介（一八九二～一九二七）は『舞踏会』と題する短編小説を大正九年一月に雑誌『新潮』に発表している。この小説はピエール・ロティの『日本の秋』所収「江戸の舞踏会」を素材にして執筆していることで知られている。鹿鳴館の開館式的全貌を、夜会に招かれたフランス海軍士官として来日中のジュリアン・ヴィオーこと、小説家ピエール・ロティは「江戸の舞踏会」に綴った。

ロティは一八五〇年一月十四日、フランス西南部のロッシュフォールに生まれ、海軍士官学校を卒業し、六十歳で退役するまで世界各地を航行し、一八八五年（明治十八）年七月八日、長崎に来航し、いったん中国に赴き、再び来日し、神戸を経て十月十一日横浜に碇泊した。井上外務卿主催の天長節の夜会に招かれ、そのときの情景を『秋の日本』の一篇として「江戸の舞踏会」に描いたのである。ロティは夜会の印象を日記に綴っているが、そこにはロティの生の鹿鳴館評がみられて興味深い。

Yedo（江戸）Roku-Mei-Kan（鹿鳴館）の舞踏会一ぱり風の装いをしたじつに滑稽な日本女性たちと踊る一とても美しい、とりわけ仮装舞踏会として特異な舞踏会……

（船岡夫利訳『ロチのニッポン日記』より）

当時の日本女性は小柄で顔がぼっちやりしたのが美人とされていたことを想像して考えると、西洋の洋服をきた彼女たちは、外国人の目からは不思議で滑稽な日本女性に映ったのは当然なのかもしれない。当時の髪型について、下記のように記す。

一隅に嘲るように、尊大にかまえた奇妙な一団一皇女や女官たちだ一もはや存在しない別世界の遺物めいた様子をした、きゃしゃで小柄な女たち、女神官のごまごわした服装、自慢の髪は糊付けにして固められ、孔雀の尾のように広げられ、それが彼女たちの頭部を巨大なものにしている……

（同上）

宮中の女官たちが桂袴姿、すなわち緋の切袴を下にはき、さらに小袖の上に幸菱文の単のみならず桂をつぼ折にして着るといふ正装で出席していた。お中という左右に髪を大きく突き出し、前方を高くし、余分な毛を背にたらしめた髪型である（富田仁著『鹿鳴館』）というように、アンバランスした彼女たちの姿はロティには巨大で不思議に見えたのに違いないのだろう。

階下では、幾つもの喫煙室や娯楽室や、盆栽や巨大な菊花を飾った室廊などの中に、立派なご馳走の入れている三つの大きな戸棚がある。一そして人々は、白い花、黄色い花、薔薇色の花の美しい三重の籬で縁どられた階段を通過して、時々そこへ下りてゆく。銀の食器類や整ったナブキンなどで蔽はれた食卓の上には、松露を添へた鳥獣とか、コロッケとか、鮭とか、サンドキッチとか、アイスクリームなど、すべてのものが、れつきとした巴里の舞踏会のやうに豊富に盛られてゐる。アメリカとニホンの果物は、しやれた籠の中にピラミッド型に積み重ねてあり、更にまたシャンパン酒は、最高級のマークのものである。

この戸棚では、見事な葡萄の実が下ってゐる。人工の蔓の捲きついた金色の格好垣の、人形じみた葉むれを見ると、日本式の凝り過ぎが思ひ出される。人々はその葡萄の実を躍り相手の婦人に進上したいと思つて、手づからもぎとるのである。さうしてこのワットオ風のさやかな葡萄の収穫こそは、この上もなく粋であった」（「江戸の舞踏会」）

このロティの文章を芥川は小説にたくみに取り入れている。明子はフランス人の海軍将校が彼女と一緒にアイスクリームの匙をとりながらも、彼の視線がたえず彼女の手や髪や頭に注がれているのを感じて、ふと女らしい疑いを覚え、たまたま傍らをドイツ人らしい若い女性が通りかかったとき、

「西洋の女の方はほんたうに御美しゆうございますこと」とわざと感嘆を込めて云った。明子としてはその海軍将校が自分をどう見ているのかを確かめようと考えて発した言葉であった。

芥川はそんな明子の言葉へ対する反応をつぎのように描いている。

海軍将校はこの言葉をきくと、思ひの外真面目に首を振った。

『日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは一』

『そんな事はございませんわ。』

『いえ、御世辞ではありません。その俣すぐに巴里の舞踏会へも出られます。さうしたら驚くでせう。ワットオの画の中のお姫様のやうですから。』

明子はワットオをしらなかつた。だから海軍将校の言葉が呼び起こした、美しい過去の幻も一灰暗い森の噴水と凋れて行く薔薇との幻も、一瞬の後には名残りなく消え失せてしまはなければならなかつた。が、人一倍感じの鋭い彼女は、アイスクリームの匙を動かしながら、僅かにもう一つ残ってゐる話題に植することを忘れなかつた。

『私も巴里の舞踏会へ参つて見たうございますわ。』

『いえ、巴里の舞踏会も全くこれと同じです。』

海軍将校はかう云ひながら、2人の食卓を続つてゐる人波と菊の花とを見廻したが、忽ち皮肉な微笑の波が瞳の底に動いたと思うと、アイスクリームの匙をとめて、『巴里ばかりではありません。舞踏会は何処でも同じ事です。』と半ば独り語のやうに付け加えた。

（「舞踏会」）

明子をワットオの画の中に画かれているお姫様のようだと評する海軍将校の言葉はあきらかにロティの文章中の「このワットオ風のささやかな葡萄の収穫」に由来する。また、“巴里の舞踏会”も同様である。ロティは鹿鳴館の舞踏会をパリの舞踏会にも劣らぬほど立派な舞踏会とみなしていたことが推測される。だが、さらに舞踏会はどこでも同じであるという海軍将校の独語を付け加えているところに芥川の皮肉を感じ取られる。

ロティの眼に映った鹿鳴館の建物の印象は必ずしも好ましいものではなかつた。

私たちの俣は、その屋根が支那式に尖端で反りかへつてゐるところの古風な楼門の下を、列をなして通り抜ける。と、今私たちは、光のただなかにヴェニス祭りのやうな真中に、無数の蠟燭が、枝附燭台の上の紙の提灯の中で燃えてゐる凝った庭園の真中にでる。さうして私たちの前には、煌々たるロク・メイカンが聳えてゐる。どの軒蛇腹にも瓦斯燈を点し、窓の一つ一つから明かりを洩らし、透きとほった家のやうに輝きながら。

ところで、ロク・メイカンそのものは美しいものではない。ヨーロッパ風の建築で、出来立てで、真つ白で、真新しく、なんとなくそれはフランスの何処かの温泉町の娯楽所（カジノ）に似てゐる。で実際のところ、ここは何もエド（江戸）でなくたって、どこでもいいのだと思ひかねまいが……しかしながら、ミカドの御紋章のついた見馴れぬ大きな旗旗は、軽やかに周囲にひるがへつてゐる。

（「江戸の舞踏会」）

というふうに、ロティは日本上流社会の人々の夜会への出席に大きな期待を寄せて鹿鳴館に出かけて来た様である。また「ミカドの御紋章のついた見馴れぬ大きな旗は、軽やかに周囲にひるがへつてゐる」とある部分は当時の上流社会の人々の軽やかさを嘲笑したのかもしれない。

ロティにとって鹿鳴館の夜会は「公のどえらい笑劇」であり、きらびやかに着飾った女性たちはそこに「異国的な美しいおどけを投げ込む」可愛い女であった。また、鹿鳴館に現われた日本の男性たちは、「ヨーロッパ人ぶらうとしてハヴァナ葉巻を應ゆらしたり、トランプのウキスキと遊びをし」ている紳士であった。長崎で一ヵ月あまりくらししたロティの眼には日本人は「尾無し猿のやうな長い着物を着た」人間に映っていたのである。

日本人を猿視したロティであるが、鹿鳴館の女性たちにはかなり好感を示している。ロティはたとえば「明らかに私たちは、ついさっき入口のところで、こと種類のなかでは最も優れたものをもってゐた人、首都最大の麗人たち、わがヨーロッパの服装を既に立派にみに着け得る唯一の婦人たちを、見せて貰ったことになる」という讃辞さえ述べているのである。また「彼女たちの小さな手は、長い透いた手袋の下で実に美しい。その中にひそんでゐるのは、決して野蛮な女のそれではない。いや却って、この婦人たちこそ、我々のよりはるかに古い、極めて洗練された文明に属してゐる種である」と見、高い評価をあたえている。もっとも、日本の女性の足は履物のせいもあり不恰好であるという批判も忘れていない。だが、ロティはその相手役に選んだ工兵将校の令嬢がフランスの田舎の娘と同様に上手に衣服を着こなし、手袋をはめた指先でうまく匙を使ってアイスクリームを食べることもできるけれど、一方、彼女が家に戻れば紙障子の部屋でコルセットをはずし、和服を着て、神道か仏教のお祈りをし、箸で米飯の夕食を取る事になるのを知っている（ロティは夜会の四ヵ月前の明治十八年七月八日に長崎に来航して日本女性お兼（小説『お菊さん』のモデル）と一ヵ月ほどの同棲生活をした経験がある）。

コルセットの圧迫の苦しみは井上馨の妻武子がアメリカのニューヨークに滞在したころの様子に現われている。

明治九年七月十八日、アラスカ号は横浜出航後二四日目に、サンフランシスコに入港した。副領事の高木三郎などの出迎えをうけて、パレスホテルに旅装を解いた。宿泊料ひとり四ドル五十セントの部屋で、アメリカの第一夜をすごした井上たちは二日後には穂積陳重等留学生と別れ、二十三日までサンフランシスコに滞在した。横浜のヴォルシュホール商会の支配人アルヴィンの案内で二十三日夕刻ホテルを立ち、翌日プリンジニアを見学し、ついで金銀の産地ナヴァタ鉱山に赴き、二日間滞在し、かつて日本駐在公使だったデグロンの案内で鉱山の状況を視察した。そのあと、シカゴ、ナイアガラをまわり、八月三日にはフィラデルフィアに博覧会の見学のために到着している。二週間の滞在中に日本からの出品もある博覧会を訪れ、八月一七日にワシントンに赴き、アメリカの政府の実情を視察し、二十四日からはニューヨークに滞在する。

武子は食欲もすぐれず、眠れず、かなり神経をいためていた。それはアメリカ上陸後に洋装になり、コルセットで胸をしめつけられ、窮屈であるのに加え、アメリカ人にくらべてはるかに背丈の低い日本女性の洋装姿の見苦しさに自己嫌悪を覚えた事もあり、毎日の生活が見苦しいものであったのであろう。

ロティは鹿鳴館に象徴される欧化主義のもつ矛盾を見事に看破しているのである。同時に、鹿鳴館夜会がジョルジュ・ビゴーによって指摘される“猿真似”としての滑稽さをも、そこに臨場したリアリティをこめてみぬいているのである。ロティは「江戸の舞踏会」に「修正前の写真の細部のやうに、事実に忠実」にその見聞を描いたのであるが、それが日本にとっても興味深い内容である事を考える。「何年が過ぎた後で、彼らの発展の過程がここに描かれてゐるのを見ることは」日本に興味あることに違いないと、ロティは断言している。まさしく慧眼である。

欧米人の生活水準に匹敵する生活を日本人が過ごしていることを印象づけることも鹿鳴館の夜会の目的の一つであったとするならば、ロティのみたその夜会はどのような意味をもって映じたことだろう。

結局、非常に陽気で、非常に美しい宴を、これらの日本人は鹿鳴館で、下にも置かない歓待ぶりでわれわれに提供してくれたのである。

たとへ私がある場所で笑ったことがあったにしても、それは悪気があったわけではない。私たちの衣裳が、あのものごしが、あの儀礼が、あのダンスが、皇室の命によつて恐らく心にもなく、速成的に教へ込まれたものではないか、と臆測を逞しくする時でさへ、彼らはまったく素晴らしい真似手であると思はざるをえないのである。また私たちにはああ云ふ夜会は、離れ業（ジョングルリ）に対する独特の手腕をもつ、この国民の最も興味のある力演の一つではないかと思はれるのである。
(「江戸の舞踏会」)

ロティは鹿鳴館の舞踏会が皇室によつて教えこまれたものであると考えながらも、日本の最も興味のある力演の一つとみているところは、鹿鳴館の夜会の本質を鋭くつくものとして注目してよいのではないだろうか。

井上馨が条約改正交渉に失敗し、外務大臣の職からも去らなくてはならなくなったとき、鹿鳴館はその存在理由を失わなくてはならなかったのである。もっとも、鹿鳴館の夜会や舞踏会そのものがなくなってしまったわけではないが、鹿鳴館に出かける貴婦人たちも、舞踏会が衰微してくると、コルセットできつく胸を締め付けられる洋装にうんざりとする女性たちは、ふたたび和服に戻る傾向が見られるという現象が伝えられているが、世の中も欧化政策の行き過ぎに対して批判を示すようになりはじめていた。

井上が条約改正交渉の失敗で退陣すると、これまでの欧化主義への反動として国粹主義が台頭してきた。

明治二十二年二月十一日の憲法発布の日の朝、森有礼が西野文太郎に刺殺されるという事件が起きた。一年ほど前に伊勢神宮に参詣したときの森の行動が不敬であるというのが西野の斬奸状による動機であったが、西野を刺客にかりたてたのは国粹主義者の政治家であるとも噂が流れた。森有礼の刺殺は、井上馨の条約改正交渉の失敗で幕を下ろすことになった欧化主義に完全にピリオドを打つというほどに大きな意味を持っていた。鹿鳴館を舞台に欧化政策を促進する必要が感じられなくなったとき、その殿堂はもはや無用の長物視されるのであった。

明治二十三年七月三十一日、鹿鳴館は宮内省との契約によつて華族会館が借用することになった。

だが、明治二十七年六月二十七日午後二時過ぎころ、中震程度の地震が東京を揺るがした。鹿鳴館の三文字が掘り込んであった正面玄関の破風が落下し、館内では死傷者が出るほどの被害がみられ、鹿鳴館の全体が使用上の危険にさらされていることが判明した。その後、修築工事が竣工し、華族会館がこの建物に移った。と同時に建物は華族会館と称することになったので、文明開化の殿堂“鹿鳴館”の名称はここに消え去ることになったのである。昭和初頭に華族会館は霞ヶ関に移ったので、日本勧業銀行がその建物を使用したのが、老朽化したために、昭和十年に取り壊されてしまった。

鹿鳴館の建物は消えたが、欧化政策の象徴であるこの殿堂の存在までが歴史の流れのうちに完全に埋没してしまったのだろうか。井上馨は条約改正交渉の促進のため鹿鳴館を建て、これを十二分に利用しようとしたが、その効果はどの程度あげられたのだろうか。

井上が鹿鳴館を純西洋建築の建物でつくろうとしたのも、西洋文明の「直輸入」こそ日本近代化の特効薬であり、鹿鳴館の殿堂で西洋の社交界と同じ夜会や舞踏会を行うことで、日本人が西洋人と同じレベルの文化生活をすることができると、真面目に考えたからである。西洋人の生活を日本人がすることで日本が不平等条約に泣く日々から逃げられる。いな、西洋人が西洋において生活するのと同様に日本で安心して生活できる時、平等な条約が締結される。そのためには日本の政治も社会もすべて西洋のそれと同じにならなくてはならない。井上馨の欧化政策の発想はこのような考えに由来したのであろう。

黄色人種独特の顔で、ボンネットに駝鳥の羽を飾り、腰がくびれ、裳の大きくひらいて引きずるように長いのを片手ですしばかり持ち上げて歩く小柄な女性が西洋音楽に合わせてステップを踏むことも、日本人が西洋人並みになるための滑稽にも哀れな努力であった。所詮は外形のみの擬西洋化の営為であるが、日本の近代化を促進させる上には必要であり、それなりの効果をあげていたところに日本文明開化の特徴が見いだせる。西洋文明へのほとんど盲目的な崇拝の姿勢が文明開化を助長していたのであり、この擬西洋化の努力が日本近代化の大きな側面を形成していたことは否定できないのである。

おわりに

上に論じたような近代日本文化について、三つの小説を通して照らし合わせてみた。

特に、鹿鳴館は日本人が西洋心酔の夢を託した殿堂であり、そこに繰り広げられた風俗模様は、時には滑稽であろうとも、それが文明開化を彩る絵巻であったことは否定できない。

今はその姿さえ消え去った欧化政策の象徴であるこの殿堂、しかし、その存在までが歴史の流れのうちに完全に埋没してしまったわけではない。近代化＝欧化的思想の鹿鳴館の精神まで消し去ることはできない。

しかし鹿鳴館に象徴されるような急速な近代化を図り、欧米の文明を直輸入しようとした日本が、文化的に植民地化されることを免れたのは、外国の文化を摂取するところだけを摂取し、自国の固有性（アイデンティティ）を保つために工夫された独自性があったからではないだろうか。

日本人の外国文化への旺盛な好奇心と吸収消化能力を、模倣（Imitation ; Copying）の文化だの、

独創性 (Originality) がない固有性のない文化だとする批判も少なくないが、私は、今の日本文化は、日本人の裏面にある日本人の特性と能力を生かして、日本伝統文化と異文化を巧みに折衷しているものであり、その特異性、多様性に注目する必要があると考える。

たとえば、明治以来、日本人が発明した最高のアイデア食品といわれるアンパンに注目してみてもいい。アンパンのアイデアのポイントは西洋人の主食であるパンに、伝統日本食を巧みに折衷融合した点である。こういうアイディアはいま現在でもカレーパン、カツサンドなどに見ることが出きる。

これも日本人が外国文化を摂取するにあって発揮する顕著な能力であって、食文化のみならず、衣文化や、全体として洋風 (西洋) でありながら、靴を抜いて部屋に入る和風を残している住文化など、様々な面でその例はみられる。思想、政治社会のすべての層にわたってみられるこの構造こそは、日本文化を特徴づける最大特質であるだろう。

たとえば、古代建国期にあって日本が取り込んだ最大の文化は仏教と漢字である。そのいずれの場合にも、外来宗教である仏教は土着宗教である神道とぶつかって優勢をかちとり、以後日本の国民的宗教として大きく社会を支配することになったが、その一方で、劣勢にたった神道も根こそぎにされてしまうことなく、両者の主宰する領分が結婚式と葬式に分けられたり、混淆したりして (寺の境内に神社が設けられている類) して共存し生き残っている。

また、漢字の場合も、そっくり日本に取り込まれ、はじめは古事記や万葉集にみられるように漢字で表記がおこなわれたが、やがて、漢字を崩し簡略化して、平仮名、片仮名という日本固有の文字が生みだされ、公的、学問的なものには漢字 (漢文、漢詩)、私的、世俗的なものには仮名 (物語、和歌) という使い分けが始まり、更に、一つの文章中、名詞などの概念的な部分には表意文字である漢字を、助詞などの関節的な部分には表音文字である仮名をあてるといった併用表記が定着した。

この特質は、明治以降近代化、西欧化へと国家社会体制が一変してからも、外来文化の供給元がこれまでの中国から西欧に代わっただけで、全く同じパターンでつづいた。

宗教的にいえば、それまでの仏教、神道に加えてキリスト教が結婚式、クリスマスなどに住み分けられている。文章表記にあっては、名詞などの概念的な部分に、従来の漢字と平行して、欧米語を片仮名書きにして挿入し、助詞などの部分の平仮名と組み合わせるという具合である。

先に例としてあげたアンパンなど、衣食住にわたる様々な和洋折衷、共存の工夫も日本独自の発想であるだろう。

こうした特異な日本文化のあり方については様々な評価がなされてきた。否定的な評価としては、明治以降の西欧文化摂取のあり方の問題がある。表面的には外国文化を大量に直輸入しているようにみえながら、実は、骨抜きの日本化しようとした結果、真の摂取にはならなかった。短時間に急激な近代化を図ったため、日本独自の折衷を生かせずに「擬西洋文化」という汚名をのこせざるをえなかったのであろう。

波乱万丈の激動の近代化を疾走してきた日本近代文化は、日本固有の文化と摂取した西洋の文化を「好い加減」に折衷 (Arrange) し、「アンパン」のような商品がうまれた。

こういう折衷文化は日本独自 (Original) の食文化を定着させた。いまや海外でも評価され日本固有の文化としてみとめられている点について私は、高く評価したいと思う。

私はそういう評価とともに「文化の発祥地」について考えてみる、「文化というのは何であろう？」と、常に疑問にもっている。しかも、私が知りたいのは「文化の原産地」がどこであるということより、「文化の辿り道、いわば背景」であって、その辿り着いた「文化の変化や経緯そして定着」に興味を持っている。

決して「文化の発祥地＝固有性」の価値を無視しようとするのではない。むしろ「文化の発祥地＝固有性」に非常な興味を持っているのかもしれない。ただし、その「発祥地＝固有性」の見方が他の人とは異なって広い範囲を持っているのかもしれない。

そもそも、「文化の辿り道、いわば背景」や「文化の変化や経緯そして定着」に興味を持つようになったのは、韓国、日本、中国の文化は非常に似ている点に気づいたからである。三つの国の文化の源は中華思想を持っている大陸の中国で、半島である朝鮮（韓国）を経緯して島国である日本に伝来したということは定説になっているが、必ずしもそうではないかもしれない。

歴史を明らかにする方法としては色々な手段があるが、そのなかで一番信憑性があるのは歴史の記録ではあろう。しかし、それでもその記録を完全に信用できないのは、文字が発明される前の時代の記録は正確さに欠けているし、文字が発明され、記録されるようになってからもその時代の政治や世界の位置付けにより、正確に記録されているかどうかはわからないからである。

と、いうわけで私は、その国の「文化の純粋な固有性」より外国の文化と自国の文化を折衷し「新たな文化の発祥地」として君臨する日本の混合文化を評価すべきだと思う。

いまだに日本文化が「擬西洋文化」だ「模倣文化」だと批判する声もありながら、いまや、日本文化は若い世代を中心に東アジア圏の韓国をはじめ中国、台湾の文化と流行に影響を与える先駆者（Pioneer）として位置付けられている。そのことを否定することは難しいであろう。

参考文献

- 岩波講座近代日本文化史『近代世界の形成 19世紀世界』（岩波書店）
近代日本文化論『都市文化』（岩波書店）
『夏目漱石辞典』（影山恒男外2名、勉誠出版）
『近代日本文学の源流』（大久保喬樹、新典社）
『鹿鳴館』（富田仁、白水社）
『標準 四訂新版 日本文学史』（文英堂）
『谷崎潤一郎論』（中村光夫、河出書房）
日本文学研究資料叢書『森鷗外Ⅱ』（有精堂）
『三四郎』（夏目漱石、新潮文庫）
『痴人の愛』（谷崎潤一郎著、新潮文庫）
「舞踏会」（『芥川龍之介全集』3所収、芥川龍之介、筑摩書房）
日本の近代（A HISTORY OF MODERN JAPAN）『都市へ』（鈴木博之、中央公論新社）

